

# 葉祥明の軌跡

文・構成 三浦正雄

## 葉祥明自身の言葉を中心とした半生の年譜

\*印は、監修者葉祥明氏ご自身が、2022年2月に、手を入れられた部分です。「」（カギカッコ外に\*印は、カッコ内の全文加筆を示します。

### ◎家族……両親ときょうだい七人の六番目の子

「父は若い時から日本と上海を船で行き来していた。とてもおしゃやれでハイカラな青年だったようだ。だから子どもたちにもできる限り見聞を広げさせてあげたいと考えていた。長崎に生まれ育った母もモダンなことが大好きで、「良き父母に恵まれた。」（風39頁）

両親は、二人とも十九歳の時にお見合いで結婚した。「結婚後、二人は店を持つたが、戦争がはじまり、いろいろあつて戦後ようやく自分の土地を手に入れ、改めて店をつくった。最初の店から八十余年、熊本の人々に愛され、今日に至っている。」（風36頁）



阿蘇の大自然を望む

### 1946年（昭和21年）

#### ◎生年月日……7月7日生まれ

「終戦の次の年に生まれ、「目には見えないけれど、戦争の記憶の中で育」ち、「平和と民主主義と自由という宝物に守られて育った。」（風155～156頁）

「僕はすいぶん長いあいだ、七夕イコール自分の誕生日ということで、毎年、日本各地での七夕さまのお祝い行事を、（悪いな、僕の誕生日を皆で祝ってくれて！）と思っていた。楽天的を超えて、とてもおめでたい少年だったかもしれない。」（風22頁）

#### ◎阿蘇……葉祥明を育てた心の聖地

「父は母や僕たちをたびたび阿蘇のゴ

ルフ場に連れて行ってくれた。子どもたちにも雄大な阿蘇の自然を味わわせてやろうとしたのだろう。」（風40頁）

「阿蘇の自然は今も変わりなく、僕の原点であり続けている。僕は、阿蘇に心から感謝している。あのころの体験がなかったら、今日の僕はなかった。」（風43頁）

「魂の故郷、阿蘇。私は、熊本市内で生まれ育ったが、自分では遙か彼方の大阿蘇によって育てられたと思っている。あの山の向う、あの空の彼方に自分の未来がある。少年の私は、朝な夕な、憧れと尊敬の念を抱いて、遠くの山々を見つめて過してきた。」（地112頁）

「阿蘇を訪れるということは、私にとつて、聖なる山への巡礼のようなものなのである。」（地114頁）

### 1948年

#### ◎弟……祥明が二歳の時に葉山祥鼎が生まれる

「弟は、ある日、突然魔法のように、僕の世界に飛び込んできた。」「その弟とは、以来、半世紀以上、つき合いが続いている。」（風17頁）

### 1951年頃

#### ◎幼稚園入園

「五歳になると僕はカトリック系の幼稚園に通うことになった。」（風22頁）

### 1953～59年

#### ◎小学校時代

「昔話や民話や紀行文に耽った。」（風25頁）

「低学年のときは、世界にも社会にも無自覚で、自分の行動も、気がついたら何かやらされているなという感じで、よくわかっていませんでした。」「五年生ごろ『テストをする』と言われて、そのときテストという言葉を」「初めて知った。学校に行つて学んだことが試される。点数をつけられ、いい点数だとほめられ悪い点数だと駄目だと言われる。嫌な世界に来ちゃったなあと思いました。中学生



幼少期の葉氏

### 1959～62年

#### ◎中学校時代

「僕に影響を与えたのは、熊本城が見える中学校での教育だった。」「思春期の少年・少女を『ジェントルマンとレディ』として処遇し、各自の自由意思と自己責任に目覚めさせることが建学の理念としてあった。少年の僕は、その理想の高さに感動した。」（風46頁）

「中学二年生ごろから、学校の勉強よりも恋愛小説をよく読むようになった。」

「ピエールとリュース」とか『潮騒』『ダフニスとクロエ』といった、少年と少女の淡い恋物語で、僕はそういうものに憧れ、胸ときめかしていた。僕の関心事は「自然」から「ロマンス」に移っていった。特に『野菊の墓』には泣かされた。世の中やおとなの社会の非情と不条理に憤慨もした。」「ギリシャ神話やギリシャ悲劇も若い僕にとつて、壮大なロマンスと逃れようのない運命・宿命の過酷さに、身の引きしまる思いがした。英文学・ロシア文学・ドイツ文学……とひかれていった。」（風25頁）

「この世の中は、私が喜びと感じることを、かなり抑えていかなければならぬのだなと感じました。だから、私はそう、自分にとつて最も自然な一四歳の